

## 「現地を訪問して想うこと」

参加者氏名：藤 田 和 育(ふじたかずやす)

卒業年：1969年 卒業学部：理工学部

「行動せずして! 得るものなし」

去る11月19日からの一泊二日の立命館大学校友会東日本大震復興支援事業「東北応援ツアー」に三度目の参加をさせて頂きました。去年は応募いたしましたが応募者多数により選外で残念ながら参加できなくて改めて今年はリベンジの応募をして参加することが出来ました。



先ずは19日10時30分仙台駅を出発、南三陸プラザで昼食と「命を守る防災の大切さ」～東日本大震災で見たこと、経験したこと、伝えたいこと～の講話を宮城県気仙沼向洋高等学校教諭 岸 貴志様より震災当日の津波の避難体験やその後、校舎を避難所として設営及び運営等、生徒の協力無くして行うことは出来なかったことを拝聴し、地域防災は地域の皆さんでの力の集まりが大切で有り、防災意識を常に持ち、具体的な備えることが減災に繋がることに再認識させられました。

次に小雨の中、テレビでも放映されたJR女川駅前のシーパルピア女川視察。第一印象は未だ嵩上げ工事中で建物は駅前以外には、まばらでこのシーパルピア女川の事業維持に一抹の不安を感じた次第です。

不安を後に松島の宿泊先「ホテル大観荘」に17時30分過ぎに到着、そのままホテルの会議室で勉強会。勉強会は校友のささ蒲鉾「ささ圭」経営者佐々木圭亮・靖子ご夫妻(共に校友)のお住まいと本社・工場の所在地であった名取市閑上地区の壊滅的な津波被害の体験と会社再建までの足跡を生々しく語って頂きました。やはりここでも岸教諭の語られた会社や家族や顧客からの絆が最大の力になったと…

また、大学の校友からの応援を現在も受けていることも大きな支えで有るとも言われていました。勉強会も終わり、会場を宴会場に移しての二時間程の懇親会と夕食、30分間のお風呂の入浴時間を取り、お世話頂いている地元宮城県校友の方々のお部屋で二次会と尽きない思い出話などでなお一層の友好を深めました。

翌20日は朝から松島観光の定番ともいえる遊覧船に乗って日本三景の一つに数えられているだけあって、お世辞抜きでいい景色でした。一巡りして1時間弱、塩釜に着き昼食を美味しい海の幸のにぎり寿司を「大黒寿司」で済ませて昨夜の「ささ圭」の佐々木社長が被災された名取市閑上地区の「閑上の記憶」を当時閑上在住の松崎江里子さんより、「仙台市で勤務中に地震に遭われて仙台市と名取市の境の名取川に架かる閑上大橋までバスで辿り着いて閑上地区へ徒歩で…。避難する人と出会うたびに『どこへ行くの・・・』と尋ねられ『閑上に帰るの・・・』と答えると、出会う人々が『閑上は何も無いよ・・・』と言われたが信じられなく避難所に辿り着いた。数日

後母に再会できた。しかし、父親のパパが見つからず・・・」思わず涙を流す生々し記憶の体験談でした。

この記憶の語り部を聞いた後、校友の「ささ圭」では笹かまぼこ原点に立ち返った厳選された白身や天然調味料を石臼でじっくり練り上げたすり身を、職人が一枚一枚丁寧に成形し、丹念に何度も返しながら手焼き「ふくゆり」が東日本大震災をきっかけに蘇った50年以上前の製法で仕上げ、手造りならではのふっくらとした厚みとプリプリ感、ぎゅっと凝縮された魚本来の旨味の「笹かまぼこ」で再建のスタートをされました。この笹かまぼこの炭火焼きを体験して楽しみ、沢山のお土産も買って仙台空港経由で一部校友を見送り後 JR 仙台駅へと一路帰路に向かいました。

来年はこの応援ツアーも区切りとして最終のツアーなので可能であれば三ルート共に是非参加したい。

末筆ですが、今回のツアーでは宮城県校友会の方々や校友会の東日本大震災復興支援特別委員の方々及び大学の校友会事務局の方々には大変お世話になりました。

「ありがとう! 飲んで、食べて、旅をして・・・皆さん応援しましょう」 終